

佐伯中学校校歌について

野々下 晃

(会員 佐伯市晴干区)

七月上旬、久しぶりに佐伯史談会誌二〇二号が届いた。梅雨季で雨の日だったので、のんびりした気持で読ませてもらった。その故か表紙の題字が代わっているのに先ず気づいた。

養賢寺第二十四世片岡省念老師の体裁の整った楷書体から潮谷寺第三十世黒木善瑞和尚の癖のある篆書体？隷書体。

また佐伯鶴城高等学校々歌については、学制改革の時佐伯中学校と佐伯高等女学校が統合された際、この校歌が残った経緯や、今歌詞の中の武か技かについて烈しくもめている事情などについては特に注目して読んだ。

顧みると佐伯中学校々歌が生まれたのは、同校第三代黒木究校長の時代であった。この校長は宮崎県の御出身で、大分県庁の県視学（この時代は教育委員会は設置さ

れていなかった）から佐伯中学校々長に赴任された生粋の教育者で、校訓（自治・信愛・剛健）を制定されたのもこの時であった。

当時中学校に校歌が無いことに介意されて、佐伯に関する歴史・風俗・環境等について詳しく研究され、これらを資料として熊本第五高等学校の国文学教授八波則吉先生に送り、佐伯中学校の校歌の作詞を依頼された。

八波先生は流石に有名な国文学者で、この資料に基づいて佐伯の土地を踏まれることもなく、あの格調高い校歌を作詞されたと記憶している。

一、山姿舞鶴に似たりとて

負ふ名ゆかしき鶴谷城

その城東の学び舎に

自治と信愛 剛健の

理想に燃えて若人が

日夜武を練り文を練る

二、番匠川の逶迤として

佐伯の湾に入るところ

許多の島の島がくれ

行き交う船の真帆片帆

煙の波や雲の波

詩趣豊かなる眺かな

三、大入島にその昔

神武の帝東征の

御船つながせ給えりし

巨巖そびえて今もなお

神の御陵威のいちじるく

御水の古井清水湧く

四、かかる自然に育まれ

かかる史蹟にかんがみる

健児の前途君見すや

城山の松 馬場の松

風にうそぶき雲を呼ぶ

雄々しき姿これぞこれ

開校六十周年を記念した佐伯鶴城同窓会名簿の冒頭には、校訓「自治・信愛・剛健」が配され、次の頁にこの校歌が載っている。

この校歌は

一番に学校の置かれた全容

二番に佐伯の地形を代表する番匠川

三番に佐伯の歴史を代表する神の井

四番に城山の松、馬場の松で締め括っている。

今もめている武か技かについては、すでにこの時期技に代わっているが、作詞当時は柔道剣道を併せて武道と称していたので、抵抗を感じたためか私は武に訂正している。

数年前、この歌を甲子園で聞いたが、あのような雰囲気の中では少々おとなし過ぎるような感じがしたので覚えている。私は明治四十二年四月七日生であるが、この校歌が生まれた当時は佐伯中学校四年生で、卒業の前年であったと記憶している。